

「境界」に置かれるチベットの護符：共同研究：チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究

著者	村上 大輔
雑誌名	民博通信
巻	164
ページ	20-21
発行年	2019-03-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009407

共同研究 ● チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究(2015-2018年度)

国立民族学博物館には「チベット仏画コレクション」と呼ばれる非常に稀有なコレクションがある。それは千点を超すチベットの護符の版木・版画であり、仏教やボン教といった特定の宗教と関連のあるものから、チベットが仏教化される以前の土着の習俗から生まれてきたようなもの、また、異なる伝統が混交したようなものまであり、文字どおり博物学的な様相を呈している。本プロジェクトでは、仏教学や言語学、美学美術史の研究者から、ボン教の瞑想の専門家、チベット仏教ニマ派(古派)の行者などさまざまな専門家が協力し、この巨大な迷路のようなチベットの護符の世界に踏み入り、その一端を明るみにすることを目指している。具体的には、代表的な護符の図像解析、文の解説、文献の裏付けを行い、当該コレクションのデータベースの構築を試みている。そして、その成果の一部として、論考集の出版も予定している。

筆者は、長年中国チベット自治区のラサに滞在したフィールド体験があり、文化人類学的な視座から本プロジェクトに関わってきた。実際に護符が「チベットの人々によってどのように使われているか」を見ていくことにより、文献学主体の本プロジェクトのアプローチを民俗の実践現場から補うのが、筆者のスタンスである。以下は、ラサ滞時にチベット人伝統居住区でよく見かけた、ある護符に関する報告である。

護符シバホ

急速な近代化・中国化の進むチベットの首府ラサ。街のあちこちには政府関連の建物が立ち並び、その空いた場所を狙って大小さまざまな商業ビルや観光ホテルが所狭しと建てられている。ラサは長らくチベット仏教の大聖地であり続けてきたが、この数十年ほどで急速に様変わりし、大きな近代化のうねりに曝されている。

そういった過度的な状況にありながら、ラサの旧市街であるバルコル近辺には、魔除けや天災除けの護符が、あたりまえのように民家の戸口に貼られている。普段はそれほど目立たないのだが、少しこちら側が意識していると、あちこちで目に



シバホの護符(2010年2月21日、ラサ)。



携帯用の金属製シバホ。十二支や九宮、八卦の文様が見える(2013年8月、ラサにて入手)。

入ってくるのがこの護符というモノなのである。

そのひとつに、シバホと呼ばれる護符がある。シバホには紙に印刷されたものや、木版によって黄色い布に刷られたもの、また、小さい金属板のキーホルダー状のものまでであるが、その意匠は大概、次のようになっている。宇宙を司るとされる亀(一説には聖獣「キールティムカ」)が炎に包まれながらその腹部をこちらに向け、九宮や八卦、そして十二支の図柄を同心円状に抱え込んでいる。その上部には、観音菩薩、文殊菩薩、そして金剛手菩薩の三部主尊の尊格、そしてチベット密教の時輪タントラのシンボルが描かれている。さらに亀の周囲には数種類の曼陀羅とともに、太陽や月、惑星、日月食を齎(もたら)すとされる羅睺(らごう)星のシンボル、そして、土地神や龍神など現世に棲む神々を封印するための徴(しるし)が配置されている。古代中国の五行思想のモチーフから、インド仏教由来のもの、そしてチベット土着の民間信仰の神々まで、多様な伝統要素が組み合わせられた不思議な図柄となっている。

そもそもその呼び名からして混交している。チベット語で「世界(あるいは存在)」を意味する「シバ」、そして中国語の「画」の発音から「シバホ」(=世界画)と呼ばれている。何がどう世界なのかを探る前に、チベットの人々がどこにどのようにシバホを掲げるのかみてみよう。

シバホの掲げられ方

まず、民家の戸口である。ゴラと呼ばれるラサの集合住宅の門や各世帯の戸口のドアなど、人が出入りするような場所に貼られる。また僧院などでは、お堂の入り口付近に壁画として描かれたりもする。護符をあらわすチベット語「ゴスン」は「扉を護るもの」という意味であり、これらはいわばその常用パターンなのであるが、シバホに興味深いのは次のような例である。

新しく家を建てる工事現場、その現場のすぐそばにこのシバホの護符は四方に配置されることがある。ラサの都市部であろうと農村地域であろうと、建築の種類いかんを問わず貼られるのである。また、葬儀にもこのシバホは用いられる。遺体を鳥葬場に運ぶ自動車の上部には必ずシバホの旗がたなびいているのだ。一方、地方からラサに巡礼に来る信者たちの手押し車や、自動車で来る場合はその自動車の扉に貼られることもあり、巡礼の長旅には欠かせないアイテムとされている。そのほか、結婚式の際に花嫁を迎えるために用いる自動車(以前は馬やヤク)や、引っ越しの際に荷物を運ぶ車、そして結婚式の宴会場や引っ越し先の新居にも、このシバホは掲げられる。

さらには、このシバホの護符を掲げて執り行われる祭祀もある。チベットの農村地域で行われるオンコルと呼ばれる収穫の祈願祭である。民族衣装で着飾った村人たちが祈禱矢を持ち、背中に経典を担ぎ、太鼓やチベタンシンバルを打ち鳴らしながら、自分たちの村の畑を右回りに周回して豊作を祈願するものである。この長い列の先頭、もくもくとお香の煙がでる籠を背負った者のそばに、このシバホは高々と掲げられるのだ。

シバホは誰に何を語りかけているのか

民家のドアや建設の工事現場、遺体を運ぶ自動車、結婚式の宴会場、そして収穫祭など、シバホが掲げられるコンテキストはまちまちであるが、シバホの護符の下部に刻まれている祈禱文を少し読むと、その背景が窺えようか。そこに、文字どおり「世界画」(シバホ)と呼ばれる所以がある。

八大惑星神よ、誓いを守れ／ 東方の元素である木の神よ／ 南方の元素である火の神よ／ 西方の元素である金の神よ／ 北方の元素である水の神よ／ … この偉大な誓いを守れ／ … 施主である我々を見るな／ 探し求めるな／ 元素の五大神たちすべては、誓いを守れ／ …二十八の星座の神々よ、誓いを守れ／ 今日のこの集まりにいるあらゆる土地神よ、誓いを守れ／ … 大地を揺するな／ 怒りや嫉妬に駆られるな／ … 行者である私が、土地の状態や水の流れを変えてしまったこと、つまり、地面に穴を掘ったり、石をひっくり返したり、ニエン(魔)の棲む樹を切ったり、ニエンの岩を壊したりなど、私の犯してしまった乱行、それが平安的なものであろうと、暴力的なものであろうと、その行いすべてに対して怒ったり、嫉妬なさらぬよう／ そしてまた、四大ニエン、十六の小さなニエン、大地の族である土地神、龍神、ニエンすべてに、平安と幸せが訪れ、癒されるよう…

解説が必要である。まず八大惑星神とは、太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星と、日月食を司るとされる羅睺星を指している。これらの天体や二十八の星座、そして、自然・宇宙の構成要素である木・火・土・金・水の五行までも、それぞれが神格化され、人間の仕業に対して嫉妬をしないよう怒りを鎮めるよう祈願されている。上には出ていないが、年や月、日など時間の単位までもが神として扱われ、時の神々が規則正しく流れていくよう懇願される。そして、チベットの人々にとっても身近な存在であり、山や谷や湖などに棲んでいるとされる土地神、龍神、そしてニエンといわれる魔に対しても平安と繁栄を祈っているのだ。

つまり、人間の生活世界を取り巻く自然一般に対して、各々の要素を述べ連ね、それに呼びかけ祈り、人間の都合による勝手な仕業を赦してもらうよう嘆願しているのだ。その人間の仕業とは前節でみたように、家や村の外部、つまり屋内ではなく自然に曝される屋外で営まれる人間の行事一般である。

「境界」に置かれる護符

その行事一般に共通するものは何か。それは一言でいうと「境界」というものと深く関連しているように思われる。

結婚式や葬式などは言うまでもなく時の節目であり、さらには花嫁や遺体が新たな場所へ移動するあいだの「境界的な空間」においては、普段の時の流れとは異なるリミナルな状態になる。大切な人・モノが「一大事」を前に見知らぬ外界に曝される脆弱な過程なのであり、それは無防備で危険な時空間となる。巡礼や引っ越しも、普段慣れ親しんだ場所ではないどこかへ移動するという意味で同様の位相にあるといえよう。また、新たに家屋を建造することは、時間的にも空間的にも「安定」していたところに(何もなかったところに)、人間の都合で土地に変化を加えるプロセスであるといえる。上述の祈禱文では「土地の状態や水の流れを変えてしまったこと、つまり、地面に穴を掘っ



バルコル近くの建設現場にて。写真の左側壁面と奥にシバホの護符が見える(2012年4月21日、ラサ)。



オンコルと呼ばれる祈願祭にて。白い民族衣装を着ている者(先頭から2番目)がシバホを掲げているのが見える(2007年7月4日、ラサ東郊外・リン村)。

たり、石をひっくり返したり……」などという具体的な言及があり、赦しを乞うている。

それでは収穫を祈る夏の祈願祭はどうか。夏の畑には害虫もいれば、季節外れの雹が降ることもある。また雨期である夏に雨が適度に降ってくれなければ、せっかく実った大麦は枯れてしまう。そういうクリティカルな時期を見計らって、麦畑の「境い目」を練り歩きつつ祈り聖化しているのだといえる。

シバホに限らず、チベットの護符の多くは境界的な場所を定めて置かれることが多い。地上や天空に棲む俗神や悪霊たちに対して結界を張るのだ。これらの霊的存在は、伝説の上では仏教の力によって教化され調伏されたことになっているのだが、我々人間と変わらない欲望や嫉妬心を抱きやすいと考えられている。そこでチベットの人々の間で重宝されているのが、行者によって加持力を吹き込まれた護符なのである。

チベット・ヒマラヤ文化圏を旅する機会があるのなら、みなさんもぜひ護符を探してみるのはいかがだろうか。そして、見つけた瞬間には、もうすでにあなたは「こっちの世界」と「あっちの世界」の境界に立っていることであろう。そのとき、現在我々が作成している護符のデータベースがみなさんのお役に立てるかもしれない。

むらかみ だいすけ

駿河台大学現代化学部准教授。専門は社会人類学・民俗学。著書に*National Imaginings and Ethnic Tourism in Lhasa, Tibet*(Vajra Publications 2011年)、『チベット 聖地の路地裏—八年のラサ滞在記』(法藏館 2016年) [第二回斎藤茂太賞・審査員特別賞受賞]。論文に『「魂」(bla)を呼び戻すチベットの儀軌『ラグツェグ』(bla' gugs tshe' gugs) —ニンマ派伝承の祈禱書の訳注と儀軌の記述』『国立民族学博物館研究報告』43(3): 485-548 (2019年) など多数。